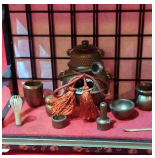
白金葭

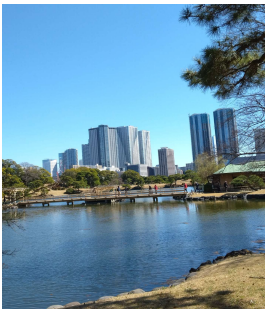
SHIROGANEYOSHI

雛七段飾（3.1）

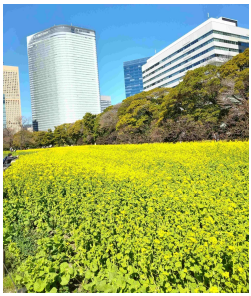
内裏雛（3.1）



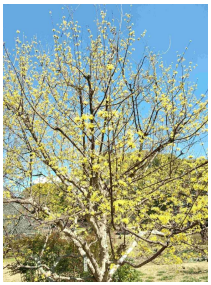
茶道具（3.1）



浜離宮潮入の池（3.8）



同菜の花畑（3.8）



同山茱萸（3.8）

我家の木目込雛（2.26）

春の泥乾きしときの無表情	璃子（穴まどひ平 21）	高志選
闇澱む枝垂桜のことに艶	〃　（　〃　）	〃
雛あられ銀座に買いひし家路かな	〃　（　〃　）	みち選
猫の手に肉球のあり春の泥	〃　（　〃　）	〃

令和 8 年（2026）　3 月号　173 号

定例句会（四月の兼題：春昼、春の夢）
四月十七日（金）アビスタ第一和室12～15
五月十五日（金）アビスタ第5会議室12～15
六月十九日金）アビスタ第5会議室12～15
二月句会（'26／3／20兼題：菜の花、雛祭）

光成高志

畦塗機直すぐに綺麗に畦を塗る
内裏雛劍の柄つかの頭まで
雛道具茶筅が確しかと立ってをり
菜の花の黄に吸い寄せられてゐたり
馬鈴薯じゃがいもを植う璃子さん思いつゝ

みち

下駄箱に銀の草履や雛祭
貝合の貝に描かるゝ雛の数
入口に貝層灯籠享保雛
菜の花に人の群がる浜離宮
千葉県知事菜の花色の服を着て

浅野正美

菜の花と桜並木と人の列
雛祭り階段に集う勝浦に
雛飾り座敷華やぐ人招く
椿咲くひよどり飛び来蜜を吸う

春日和花籠届く誕生日

佐々木由紀子

菜の花やテーブルの上に活けて咲き
おひなさまおだいりさまとすまし顔
おひなさま老人ホームに飾られて
夕暮れのあぜ道に咲く菜の花よ

山尾万世遊

自転車を下りて押しゆく菜花晴れ
妻をんな七六の夫と雛かざる
流し雛のポスター揺るる単路線
古雛自ずからなる気品あり
矢倉とは仏の住居菜花揺る

尾崎昇

雨上がり鍬持ち試す農具市
耕して土のベットに撒かれをり
春落葉雨の公園愁いかな
雪柳揺れる枝葉や風まかせ
菜の花やひとひらごとに舞い落ちて

173号選句一覧　○字は選者の頭文字。黒塗りは特選
畦塗機直すぐに綺麗に畦を塗る
下駄箱に銀の草履や雛祭

菜の花と桜並木と人の列
菜の花やテーブルの上に活けて咲き
(高)(昇)(み)自転車を下りて押しゆく菜花晴れ
(み)雨上がり鍬持ち試す農具市
内裏雛剣の柄(つか)の頭まで
(正)貝合の貝に描かるゝ雛の数
雛祭り階段に集う勝浦に
おひなさまおだいりさまとすまし顔
妻をんな七六の夫と雛かざる
耕して土のベットに撒かれをり
(昇)(み)雛道具茶筅が確(しか)と立ってをり
　この句は雛壇の茶筅に注目されたところが良かったと思います。
入口に貝層灯籠享保雛
(高)(昇)雛飾り座敷華やぐ人招く
(高)(み)おひなさま老人ホームに飾られて
(正)流し雛のポスター揺るる単路線
春落葉雨の公園愁いかな
(昇)菜の花の黄に吸い寄せられてゐたり
椿咲くひよどり飛び来蜜を吸う
夕暮れのあぜ道に咲く菜の花よ
(正)古雛自ずからなる気品あり
(正)(み)雪柳揺れる枝葉や風まかせ
　雪柳は剪定しなければどこまでも伸び放題。手招きしているように
も見える。誓子に「雪柳白き手套の手を振れり」があるように。
馬鈴薯(じゃがいも)を植う璃子さん思いつゝ
(高)千葉県知事菜の花色の服を着て
　以前堂本暁子知事と風土記の丘で会った時、私はきれいなジャケットですねと声を掛けたら、菜の花ルックよと返された。それをみちさんに話した。郷里の俳人木下夕爾に「家々や菜の花色の灯をともし」がある。両方が合体してみちさんのこの佳句が出来たのだ。
春日和花籠届く誕生日
(高)矢倉とは仏の住居菜花揺る
菜の花やひとひらごとに舞い落ちて
(昇)(正)菜の花に人の群がる浜離宮
　地域のことを俳句で詠まれておられる俳句があると思いました。ネットで分かる範囲で調べました（昇）。

俳窓評論纂

　今年（二〇一一）正月の朝日新聞の文化欄に「芭蕉に源流　軽さの境地」の見出しに一寸驚いた。記事の概略は以下の通りである。小説とも漫画ともつかぬその両方の特徴を生かしたライトノベルという分野から文壇に打って出て直木賞などの各賞に輝くライトノベル作家の活躍がめざましい。小説と漫画のハイブリッドがライトノベルだ。建築界でも、軽い建築が世界的注目を集める。ルーブル美術館分館はガラスなどの箱が連なる。これは日本人建築家の設計であり、プリッカー賞という建築界のノーベル賞を受けた。日本の軽音楽はジャズからフォークまで含み膨張して

きた。軽自動車というのも日本の発明だ。昔のてんとう虫タイプの小ぶりの車はインドなど新興国でも人気だ。こうした軽い文化は過去にもあった。17世紀の芭蕉が唱えた俳句の理念「軽み」はその一つ。響きのやわらかいかなや大和言葉を多く使うことでかえって心の奥底の感情がよく伝わる。ものの皮と同じ。薄くすれば中身がはっきり見えてくると、俳人の長谷川櫂さん。芭蕉は、奥の細道を旅し、いくつもの別れを経るうち、軽みの境地に達した。軽みによって、芭蕉の俳句は世界の重みをとらえた。現代の「軽い」文化は、時の洗礼を受けても生き残れるのか。従来の立派な建築が権威的でウソっぽく見えるようになった。対照的なのが「軽い」建築だ。ライトノベルも権威からの浮遊が原点にある。作者が主導権を握っているのに対し、ライトノベルでは読者の力が非常に強い。ライトノベルも軽い建築も批判的な意見が付きまとっている。軽く見えるのは、作品の作り手と受け手の間の境界がないから。集合知的ともアジア的ともいえる。ここまでが記事の要約です。芭蕉のかるみは、譬えれば、登山の頂上に立った気分ではなかろうか。裾野から長い年月をかけて倦まず怠らず一歩一歩登っていってはじめて頂に到達できる。ただ言葉どおりの軽いものではない。建築とて、桂離宮のような自然に開いた建築が軽い建築の粋だと思う。（2011.1.11の草稿を読み返してみて今も古くはないと思ったのでここに掲載しました。）

＊3.5朝日の教育欄にありのまま日常を詠んだ革新　松尾芭蕉おくのほそ道（一七〇二）の見出しにて年譜とほそ道の地図（往2400キロ約150日間）が載った。同居のみちさんが「お父さんが皆知っていることよ」と言ったとおり、初学の人向けの記事である。新しく思えた所を紹介する。伊賀の芭蕉翁記念館での企画展「俳聖になった芭蕉」が3.8まで開かれていた。服部温子学芸員が対応している。和洋女子大の佐藤勝明教授のコメントは、当時は連句を詠んでいた。その発句が独立して俳句となった。掛けことばや見立てのような頭俳句でなく、芭蕉のすごさは「ありのままを日常的に詠んだことにある」。それまでの俳人は集まりなどで連句を作ることはあっても、普段から俳句を詠むことはあまり多くはなかった。「同時代の他の俳人と比べて、芭蕉は詠んだ句数が圧倒的に多い。そのきっかけとなったのが、旅に出るという行為だったのだと思います」♡江戸から東北、北陸を巡り、美濃・大垣へ。最後は「伊勢の遷宮おがまん」と舟に乗る場面で終わる。旅のさ中にリアルタイムで書かれた作品ではなく、フィクションに近い紀行文学と考えるべき作品だ。門人である去来が「翁奥羽の行脚より都へ越えたまひける、当門の俳諧すでに一変す」と記したように、おくのほそ道では詠まれた句も大きく変化した。たとえば、山寺で詠まれた「閑さや岩にしみ入る蝉の声」のように、目の前のことを、詩情を踏まえつつ、そのまま詠んだ発句

は「芭蕉以前には存在しなかった」と佐藤さんは語る。「写実に近いことを実践している点で、芭蕉は俳句近代化の祖と言ってよいのではないか」♡最後の節には、豊橋技術科学大教授の中森康之さん（俳文学）の評が載っている。要するに、この旅で感得した、不易流行論をやさしくのべている。（私が感嘆するのは芭蕉が死の床で詠んだ「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」という辞世句です。現代の俳句と言ってもよい何ら違和感のないその時の芭蕉を表現している点です。ここから俳句の近代化は始まったのだ。一茶の句や蕪村の句を読んでいくとそのことがよくわかる。子規や虚子そして誓子もその精神を外れる事はない。誓子がそれが芭蕉から伝わった正統俳句ですと断定される心持も今はよく〳〵わかります。この記事にかこつけて長居は無用。）

芭蕉の軽み以後（123）　光成高志

「今此御光一天にかゝやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穏なり。」この本文を徳川家康賛美の句として採るか否かである。栗田勇著でもここは歯切れが悪い。次の本文の「猶、憚多くて筆をさし置きぬ」をよくよく解釈すれば自ずとわかると私は思う。後の出羽三山のくだりの「惣して、此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとゞめて記さず。」とあるのと思いは同じだと思う。いずれも、霊山、即ち天台の尊厳神秘に対する敬虔な気持ちにもとづいている。あまりに畏れ多くて筆を加えるのは差し控えたいというものだ。芭蕉の今ある姿と、言わんとする日光山との関係を考えればどうのこうと言えるものではないと自制したのだ。芭蕉の畏友の山口素堂は「翁、自釈する也。前後に、かゝる桑門乞食巡礼如き人を助給ふにや、といふ文を爰に顧て、日光山ほどの御神徳を可申にあらずと、奉恐生前結後の法也」と『奥のほそ道解』に書いている。これが芭蕉の意をよく言い尽くしていると栗田著は記す。同感である。素堂の文は漢文的に書いてあるので、我流で訳してみると、翁は自ら解釈している。前段に、このような世捨て人乞食巡礼如き人を助けて下さる、という文をここに顧てへりくだって控えめに言われた言葉である。このような身にして、日光山ほどのご利益をとやかく申すべきではありませんと、恐れ奉る生前結後の法也と、最後のところは私には訳せません。そのあえて言いきれぬ心を受けたのが「あらたうと青葉若葉の日の光」の一句である。この句の初案は「あなたふと木の下暗も日の光」である。曾良の「俳諧書留」という覚書の冒頭に「室の八島」として五句あげた第二句目に書かれ、他の四句は室の八島関係の句ばかりなので、日光に入る前にすで

に出来ていたのであろう。我々がよくやる頭俳句ではなかろうか。どこかで昔読んだこれは木下藤吉郎の木の下があるので没にしたという論は現代から邪推した俗論であり、コメントに値しない。真蹟懐紙に「日光山に詣　あらたふと木の下闇も日の光」とあるのが第二案で、「あなたふと青葉若葉の日の光」は定稿になる直前の第三案である。初案の句の季語は木の下闇で鬱蒼と茂って昼なお暗い夏木立の様相。日の光は日光を利かせたもので、例文は多いとか。「あなたふ」は前述の素堂の『奥のほそ道解』並びに『奥細道通解』（安政五年一八五八年馬場錦江著）にあげられているように、連歌の切字における大回しの例文としてよく知られている「あなたふと春の日みがく玉津島」から採られてものである。素堂はこの例句など思い出して、翁、あら尊とうとの五文字を据へたりと見ゆ。一躰趣向も暗に模したり、としている。「あら」は感嘆符であってここに趣向を凝らしたのだと言っているのだ。句意は、なんとまあ、尊くありがいことか。ここ日光の霊山の木々の青葉や若葉に降り注ぐ日の光は、となる。私なりに鑑賞してみると、「木の下闇も日の光」では、夏に盛んに繁った木立に入ると暗い感じがする木下闇まで日の光が射してゐるというもので、理屈が先走り暗に日光東照宮の御威光と結びついて俳句らしさ、つまり理屈抜きの青葉若葉の美しさ、みずみずしさが奥に隠れてしまう。上五の「あらたふと」と感嘆した言葉、なんと尊いことかと離れてしまう感じがする。日光の神霊の御威光とは、もともと勝道上人が朝夕怠らず朝家及び国民の安寧を祈り奉った日光山であり、また日光山は勝道上人と空海和尚の二人の徳によって開かれ、皇家鎮護の霊地也とされている。東大寺二月堂の修二会の精神とおなじものである。元来、日光山は仏法鎮護、国土安寧を祈願して開かれている。要するに個人の悩みばかりでなく天下国家の安寧、仏法鎮護を正面から掲げて開かれた山なのである。これ等の事は芭蕉が訪ねた「大楽院秘書」に書かれているとか。芭蕉はその資料を目にしたか、話に聞いたのではあるまいか。そう考えると、「恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖すみか穏おだやかなり」という文言は、短絡的に東照宮の礼賛ではなく、もっと前の、皇室鎮護、国土安寧を祈願して、日光を開いた勝道・空海に想いを馳せて満願権現の神霊に対する畏敬の念から発するものなのである。そしてまた「あらたふと」という上五は、能の「あら尊たっとや今日もまた紫雲の立って候ふぞや」（『実盛』）、「あら貴たっとの御法みのりや

な」（『錦木』）、「あら貴たっとの御造みつくりや。聞くも名高き雲の垣、霞の軒も玉簾たますだれ」（『金札』）などから採ったものである。神域を蔽う初夏の青葉、きらめく初夏の光。死と再生の自然の不可思議。その感動は、そのまま神様への畏敬となる。美的感動がそのまま祈りとなる。そこには、芭蕉の親しんだ能のワキ僧の姿があった（栗田著）。

俳文広場

❶終活　永年会社勤めをした娘が昨年七月末退職した。パソコンと格闘する経理の仕事で、目の不調、体調も気になりはじめた。家に居るようになり私もようやく楽になれるとホッとした。娘は気になりながらも出来なかった家のかたづけをこの際一気にやる気になったようだ。裏の洋室を片付けたいと言う。ここにはとりあえず置いているダンボール、古い大きなスーツケース三ケ、ゴルフバック、組立式の鉄棒、健康機器類等々沢山の物が詰め込んである。私の趣味でやっていた書道の道具、掛け軸、額、辞典、半切などの用紙類が押入の棚に所狭しと詰まっている。この部屋はもと〳〵書の練習をしていた所でこれで一段落と筆を置いた時必要な物だけ残し整理した。しかしあれからしばらく経って改めて見るともう使わないかなと思える物も目につく。娘家族と同居するため、十八年前リフォームした時、古い家具食器類贈答品の箱等とりあえずここに置いた物が日の目を見る事もなくそのまゝになっていた。（中略）私の物については一つ一つ確かめながら決める。思い入れのある品懐かしい品大切な品と判別しながら、（中略）十二月中旬の晴れた日、東広島市から知り合いの回収業者が来宅、出した物すべてを持ち帰り、後日買取りの金額の通知をもらった。スーツケース、ゴルフバックはもう少し評価されると思っていたのだけどな。しかしどの品も海外へ送り誰かに使ってもらう、捨てはしないとのことで無駄にならず生かされて使ってもらうので、あれはそれでもいいかと納得する。幾日もかけて分別し、かなりすっきりした。私の部屋にある亡夫の書棚を改めて整理してみる。百冊以上の俳句帖には夫の字で夫の詠んだ句がびっしりと埋まっていて、その時の思い、息遣いが満ちあふれている。まだここに居るかのように温もりが感じられる。短歌・俳句に関する本・辞書・月刊誌等どれも手放すことは出来ない。私の生ある限り傍に置いておくつもりだ。いつかは誰かの手を煩わせる事になろうとも。私の衣類、本等は少しずつ断捨離している。しかしこの度思いがけず娘からの刺激を受けて身辺整理することが出来た。自分の人生を振り返り本当に大切な物を見つける貴重な機会だったと思う。残り

の時間を思い残すことのないよう、自分のやりたい事を書き出してみよう。時にまかせてゆったり過ごすのもいいが、出来ることをすこしずつ叶えていけたらいいなと思っている。書き終えてふと窓の外に目をやると、うす暗い雲の間から夕焼けが美しく光を放っていた。あっと驚いた。昼からは曇り空で時折り小粒の霰がパラパラと地面を叩いて跳びはねていたのだ。今はオレンジ色の光が穏やかにあたりの雲を彩っている。頑張れよ！と背中を押してくれているようだ（1.8廣本幸恵）。

❷齋藤嘉久先生の思い出　私の家から三キロの所にSさんの住居がある。Sさんは地元の俳句の先生である。一年前に脳梗塞で倒れて今は半身不随のため、リハビリ中である。八十歳のSさんと八十一歳の夫人の二人住まいである。Sさんが倒れられてからは時々訪れるようになった。道端の草花をひと握り掴んで行く。仏の座であったり、花大根であったりする。この間は車椅子での散歩に同伴した。四十代の痩身の女性ヘルパーさんが車椅子を押す。二十年位の桜が五十本ほどある並木道に向かった。丁度桜は見頃で風に揺れている。大島桜が二本、他は染井吉野である。辺りは手賀沼干拓田が続く。春田が見渡せる。前日の雨で代田と見紛うほど水に浸かっている。Sさんが道端の芥子菜を指差した。「芥子菜漬にしてもおいしいけれど、この位の時、先端を摘んでお浸しにしてもいけるよ。ヘルパーさん摘んでちょうだい」私も摘んだ。ヘルパーさんの袋に一杯になった。土手の斜面に立っている私の足元には野蒜の群生があった。いつの間にか葉を摘んでいた。野蒜の葉は五ミリにも満たない糸状の太さなので掴んで根っこを抜くのは難儀なことである。地盤の軟らかい所と、葉の太さの条件が備わった時、思わぬ収穫に出会う。黒い土を着けて真珠のような玉が現れる。鼻唄が出る。暫くの間、野蒜抜きの世界に浸っていた。Sさんの車椅子はかなり先へ行っていた。Sさん宅へ戻り、私はわが家同然床に座り込み、新聞紙を広げて野蒜の下拵えをした。Sさんは生の野蒜に味噌をつけて食べたいといわれたが、さっと茹でて酢味噌和えにした。Sさんの指示でいつの間にか、榠樝酒がグラスに灌がれた。Sさんは調子付いてそれをストレートで飲み干したので夫人の目は白黒。実はお酒で倒れられたSさんである。Sさんは齋藤嘉久先生のことです。（光みち2004追悼文）

函館　台風十六号（二〇〇四）が去った翌日、札幌から函館に回り、午後出発の観光バスで五稜郭、元町を歩き、函館湾をぐるり船で一周、赤煉瓦倉庫を見た。翌日は、観光スポット循環バスを利用して、啄木の浜

を歩き、立待岬の啄木碑を見、函館山に上って市街と津軽海峡を一望し、下りてハリスト正教会聖堂に入り壁画を見た。この近くに龜井勝一郎生誕の地碑があったのにミス見逃した。午後はトラピスチヌ修道院の庭を廻って帰った。函館山麓の外国人居留地跡界隈を歩くと、長崎や杵築の坂の町のイメージが湧く。一階が和風、二階が洋風の住宅は今も使われている。三つの教会の端を浄土真宗の寺の甍がべったりと占めている。ハリスト正教会聖堂を拝観して出ると、がんがんと鐘が鳴った。八重洲のカリヨンを破鐘にしたような音色であった。八幡坂を下りて赤煉瓦倉庫群の海鮮食堂でホッケ定食を頼むと、大きなホッケの塩焼きが出てきた。トラピスチヌ修道院の入口には錦木がもう紅葉していた。小冊子により又写真集により修道女の生活が紹介されており、それを見るだけでも清浄な気分になる。安政六年（一八六〇）の通商条約による開港によって斯く西洋の影響を受けたのである。亀井勝一郎氏は函館をロマティシズム、小樽をリアリズム、札幌をピューリタニズムと呼んで見たという。三市に縁ゆかりの明治の文学者を当てはめて、何となく分かる気がした。函館は私にとって切ない町であった。（平成15屋根投稿文）

お便り広場

いつも171号の白金葭を送付して頂きありがとうさんです。光成さんがこの本を発刊されて15周年と受け賜りました。長い期間・続けられたのは素晴らしいことであります。本当におめでとうございます。俳文広場　この欄には、たくさんの人からの俳文が紹介されており、投稿された人の言葉を楽しく拝読しております。白金葭171号に記載されておりました、廣本幸恵さんの『ジョービタキ』が自宅の庭に毎年飛んできて家主と会話している様子が目に浮かびました。鳥からの「ピュン・ピュー、」が、大変うまく記述されており、一時の鳥の様子がよく観察されていますね。私は、近くの仲間と「バードカービング」「鳥の彫刻」を楽しんでおりますが, 鳥の声には未だ良く聞き分ができません。この欄で私が一番感じたのは光成氏の、「我孫子の落日」の書き出しである、木枯らしの吹き荒びし一日、天に一片の雲なき夕べ、二階ベランダにて西方に望む、遠き富士裾まで見ゆる心の高まりを抑えられず。この文意に感動しました。この文書の表現は我々には、できません。流石ですね・・・これからも皆様からの楽しい言葉をお待ちしております。私の駄作を次の通り投句させてい頂きます。宜しくお願い致します。皆様の健康を祈願しております（3.7寿幸）。前略「白金葭」二月号を送り頂きありがとうございました。ようやく春の気配が感じられるようにな

りました。三寒四温でまだ寒い日も訪れています。春に向けて縮こまった体を、気分を思い切り動かしたいとおもいます。よろしくお願い致します（3.9 幸恵）。（追伸によると一月号が届いていなかったのですね。本日3.10に再度送りました。こういう場合には封筒に押してある拙宅の電話番号に遠慮なく電話下さい。幸恵さん宅の電話番号を知りたく姉に頼んだ次第です。高志）

3月投句いたします。三寒四温の日々体調お気をつけお過ごしください（3.15 正美）。前略いつも大変お世話になっています。今日（3.13）白金葭一月号届きました。ありがとうございました。お手数をお掛けしてすみませんでした。あのようなお手紙を差し上げご心配をおかけしてしまいました。頂いた句誌の表紙に尉鶲ジョウビタキのきれいな写真が載っていて驚きました。表紙の古い絵画や写真、さし絵なども楽しみです。お二人の写真もお若くお元気そうで、光成さんも変わっておられなくて安心しました。先日は直接お電話も頂いてとても懐かしかったです。これからもどうぞよろしくお願い致します。かしこ（3.13 幸恵）

御元気で御活躍のことゝ思います。いつも冊子をお送り下さりありがとうございます。又午年の俳句をとり上げて下さり恐縮です。同封した冊子は新家の小野さん（81才）が自費でご配布されたものです。お酒を断って何年もかけて次々と仕上げられました。余分に下さったのでお送りします。お礼にはお酒をもっていきました（3.18 百合子）。（ふるさと福相学区「ぶらりと散策」二〇二五年6月受け取りました。以前もらった「燈々無尽」二〇二〇年版、同二〇一九年版も持っています。これで同じ名前の本が三冊になりました。中身はそれなりに実録でしょうから懐かしく読んでおります。いつだったか広島のおばさん（本家から槙田へ嫁いだ）から頂いた芦田町散策（内田重徳著 昭和63年一九八八）も読みました。その後東京での関東在住の戸手高校同窓会にて放送大学図書館資料のコピーを貰いその中に光成氏の名前が書かれてあり、私はこれを光成の先祖と信じて、土肥実平の出身地の酒匂川奥の山北を訪ねたりした。東京の大倉集古館にある前田青邨の「洞窟の頼朝」の中の武将の一人が土肥実平だとこれも信じている。今思い出したのですが、二〇一九年版を貰った小野乃史さんにお礼の手紙を書いております。令和元年八月二十四日の手紙です。こんなことを故郷を出て行ったものが過去のことをとやかく書いても仕方ありません。これも菩貴女が福田に帰るというので、賀状でわれこだまにならんという句を書いた覚えがあります。そういう事を思い出しました。ともかくもありがとう！高志。

前略一年余り連絡しないでごめんなさい。姉から兄さん達元気でいる事聞いて、やっぱり兄さんは元気でかわりなく自分の人生を楽しんで過ごしていると信じて思っていました。健三兄の死から一年ずっと気になりながら手紙を書こうと思いつつ・・日々が過ぎてしまいました。健三兄のウランドゴルフの道具を譲ってもらいゴルフ始めて一年今は楽しく続けています。老人の仲間達とおしゃべりしながら楽しんでいます。週三回ゴルフの日は一日何かと体を動かして過ごせます。でも何もない日はゆっくり家で過ごしています。いくらでも自由な時間があるのになかなか動けて

いません。自分に気持ちがないと動いていない自分が情けなくだんだん年老いることがさびしいです。いくら年取っても子供達のこと思ってしまうのが母だと思います。私には父さんは居なくて母が一人子供達を育てる生活がいっぱい〳〵で一番小さい私など思いやっている時間など無かっただろうと想像して私は愛情不足で育ったのだろうか、人一倍子供達の事廻りの人の事ばかり考えている私は自分には心から甘える事なくの人生近くに居る主人に強く言ってしまう自分を分かっていながら、性分はなか〳〵直りません。兄さん達男の兄さん達はみんなやさしかったです。元々男と女は生まれた時から頭の働きが違うようです。女は掃除しながら洗濯しながら料理しながらといつもあれこれと二つのこと考えながら動けますが、男の人って言ってもなかなか動けずそれが大変だけどもう考えない事としてあきらめて過ごしています。これからは日々暖かくなると畑の草、庭の草が大変です。毎日草引きしながらゆっくりコーヒー飲んで楽しむことにします。四時から神谷川の土手を三〇分ほど隣の友とウオーキングして途中ベンチに座っておしゃべりしたり毎日続けています。主人は相変わらず家に居なくてあちらこちら出かけています。元気です。子供達孫達私達に良くしてくれます。感謝です。この調子で体はだんだんうごけなくなると思いますがそれも楽しんで日々かわいい私でいられるよう気持ちをやさしくゆっくり元気で過ごす心から思っています。兄さん達はいつまでも元気でゆっくり生活しましょう。乱筆乱文ごめんなさい。（3.16 峯子）（あなたの今の生活がよーくわかりました。その調子で生きて行って下さい。いつもトラウマのように言う空襲の時廃敷に寝かされていたという愚痴はそうではないです。火の見櫓の下にあった大きな防空壕にあかはねの家族と皆入っていた。家の庭に立って空を見上げていたのは父だったと思う。それから防空壕迄皆移動した。あかはねの友吉さんが猟銃を空に向けてわめいていた。三歳五か月僕の記憶です高志）。

我孫子日記

	2/20 句会
	2/23 休会届
	2/27
*	武蔵屋・柏屋
	3/1
*2	雛祭二軒
	3/5
*3	新見宅（浦部）
	3/7 駅前ク（泌尿）
	3/8
*4	浜離宮
	3/11
*5	ふれあいサロン&3.11忌
	3/16 こやの皮膚科
	3/20
*6	通信句会&茶会

＊ひな祭準備の桶に桃の花
雛祭これは本物桃の花（みち）
夢想庵緋毛氈敷き雛飾る
貝層の行灯庭にひな祭
武蔵屋の庭に大岩梅の花
裏庭の土の庭にて犬ふぐり
蓬摘むそびらに群生犬ふぐり
*2 貝合わせの貝に雛描き五段飾り
立雛屏風を背にして立ち給ふ
五人囃子口紅塗って男の子かな（みち）
床に届く長き耳なる兎雛（〃）
立雛拡げる袂硬きこと（〃）

竹筒にかぐや姫なる女雛ゐて（〃）
茶席にて焼いもを召すお雛さま
雛祭抹茶を点てゝ餅焼いて（みち）
ひな祭庭に設え緋毛氈
蔵放ちオカリナの鳴る蔵の雛（みち）
オカリナ吹くスワンカルテットひな祭
*3 武相荘にあやかる古民家蕗の薹
前庭に竹の秋あり鴉鳴く
*4 鷹鳩と化して車中みな眠る
菜の花や恩賜公園ビル谷間
菜の花の中に道あり土埃（みち）
菜の花や道の左右に遅速あり（〃）
啓蟄の一寸蜥蜴すぐ隠れ（〃）
枯色の細木の牡丹芽吹きをり（〃）
山茱萸の根本椋鳥啄ばめり（〃）
菜の花の中へと園児消えてゆく（〃）
山茱萸の黄の点々と青空に
風の木斛もっこく春光にてらてらと
昼食を探して迷う春疾風
*5 花は咲く歌って終わる3.11忌
*6 春の茶会網代天井先ず見上げ
春雨や茶杓の銘は日々新た
春雨や大正硝子の記念館（みち）
楚人冠の小さき胸像鳥曇（〃）
春寒や茶釜鳴りだす低き音（〃）

編集後記

3.11の東日本大震災から15年の見出しにて梶原さい子さんがその短歌を三月15日の記事に拾い出している。同日の左右の歌壇俳壇にはそれらしい歌、句はない。世界の何処かで戦争ばっかりしている影響かもしれない。私はそういう世の動きに無関心では居られない。時々テレビに向かって大声で怒ったりする。隣のみちさんにやめてよ！と注意される。選択性難聴でもその声は聞こえるらしい。私は目も耳も歯も問題ない。しかし,他は覚束なくなってきた。先に頭のＭＲＩを撮り認知症のテストも受けた。以前より良くなっていると言われ、ほんとかいなと思いました。自慢ではありません。プールとジムを休会にしたらかえって忙しい。です。

白金葭三月号（通巻173号）誌代一部千五百円（年会費一万五千円）郵便振込口座一〇五二〇—四二一三六一名義シロガ　ネヨシ令和八年三月22日発行編集発行人光成高志発行所〒270-1119我孫子市南新木2-14-17光成方　投句先：メール又はライン　印刷製本：喜怒哀楽書房〒950-0801新潟市東区津島屋七二-九。表紙の題字は嘉悦羊三&3.1の雛祭の写真&3.8の浜離宮&家の木目込雛&璃子さんの句集「穴まどひ」よりの選句。